

大都市の親子関係

— 東京都新宿区のばあい —

吉 田 恭 爾

筆者は東京都新宿区において児童とその親の意識を調査する機会があった。この論稿では、その調査結果の要点を報告し、若干の考察を加えたい。

I 東京都新宿区の位置と人口

新宿区は、東京都23区のほぼ中央に位置し、千代田区・文京区・豊島区・中野区・渋谷区・港区の各区に隣接している。区役所庁舎中央部の地点は北緯35度41分26秒、東経139度42分23秒にある。

面積は18.04 km^2 、周囲約27.5 km 、東西約6.5 km 、南北約6.2 km で23区の総面積の3.21%を占め、12番めの広さである。

この区の地形は台地と低地からなり、豊島台地、淀橋台地、下町低地に分けられる。台地の平均標高は30 m で、戸山町にある箱根山は海拔44.6 m で23区中最高である。もっとも低い地点は、飯田橋付近の海拔4.2 m である。

台地部の地層は、地表から関東ローム層、武蔵野砂礫層、東京層があり、低地部は埋土の下に沖積層、東京層があって台地部、低地部とも東京都の下にさらに三浦層群がひろがっている。

人口は昭和55年1月1日現在の住民基本台帳で333,087人である。世帯数は154,855世帯で、このうち約半数(78,051世帯)が単身世帯である。一世帯平均人員は2.1人であり、渋谷区とならんで世帯平均人員が小規模な区となっている。

20才未満の人口は、全人口の23.2%である。

昭和50年の国勢調査によれば、昼間人口は653,256人である。このうち400,736人が就業者である。就業者を100%としてその内訳構成比をみると、第1次産業0.1%、第2次産業25.8%、第3次産業73.7%、その他0.4%となる。第2次産業では製造業の17.4%、第3次産業では卸売業・小売業30.3%、サービス業25.0%などが主要である。

家庭裁判所現代非行問題研究会編著『日本の少年非行』(大成出版社1979年)によれば、東京の少年非行の特徴は薬物乱用非行の増大、暴力非行の増加、16才以下が過半数を占め、しかもその年齢層の非行発生率が(全国の)平均値をうわまわっていることとされる。(筑波社会科学研究第1号 1982年

野健吾)。

昭和55年に新宿区警察署管内で補導された非行少年は11,367人であった。これを100.0%として、区内在住少年の占める割合は15.14%である。新宿区における少年非行は流入してくる少年たちによってなされる割合が高い。これは、歌舞伎町など全国有数の盛り場があることなどと関連している。たとえばそれは他の府県に在住する少年たちの補導件数が総体の32.74%であることなどからもうかがえる。

II 調査・意図と方法

この調査の意図は東京都新宿区に住む青少年の生活と意識およびかれらの親の意識を調べ青少年問題についてどのような社会的方策が必要とされているかをさぐるところにある。青少年問題において親子関係が注目されるゆえんは、それが子どものもっとも原初的人間関係であり、社会化の第一歩をなすとかんがえられるからである。これらにくわえてこの調査においては、子どもの余暇生活、遊び場、友人関係の実態、自殺、逸脱的行動についての意識をさぐることもねらわれた。青少年問題をかんがえるうえで、これらはかかせないトピックスである。

こうした意図をはたすためにつぎのような調査方法をとった。まず第一に、調査対象を昭和37年4月2日から昭和45年4月1日までに生まれた青少年とその父母とした。調査の客体は住民基本台帳から32分の1の等間隔で抽出した。調査の方法は、信頼性、妥当性を最高水準でたもつために面接調査の方法をとることにした。親子関係をもっとものぞましいかたちで調査することをねらうならば、各家族における父母とその子どもの総体を客体とすべきであろう。こうしたばあい父母と子どもひとりの世帯でも面接は3人になされなければならない。この方法は、調査にかかわる客体の抵抗を高いものにするとかんがえられる。そこである世帯では父とひとりの子を調査し、ある世帯では母とひとりの子を調査するという方法をとることにした。

調査時点は、昭和55年8月20日から31日までとした。これは夏休みの終りの時期で比較的に対象が家にいることが多いと想定した時点である。

親子のペアで調査が終了し有効回答となったのは父子ペア306、母子ペア362である。

有効回答の子どもの学年別・性別実数と構成比は次のとおりである。

表1 親子ペアで調査対象となった子どもの数

性 、 別	小 学 生		中 学 生			高 校 生			計
	5 年 生	6 年 生	1 年 生	2 年 生	3 年 生	1 年 生	2 年 生	3 年 生	
男 子	43 12.8	54 16.0	58 17.2	39 11.6	37 11.0	38 11.3	37 11.0	31 9.2	337人 100.0%
女 子	44 13.3	40 12.1	39 11.8	34 10.3	58 17.5	45 13.6	39 11.8	32 9.7	331人 100.0%
計	87 13.4	94 14.1	97 14.5	73 10.9	95 14.2	83 12.4	76 11.4	63 9.4	668人 100.0%

表2 親子関係別調査数比率

() は実数

		母子関係	父子関係	不 明	計
小 学 生	男	47.4	52.6	0.0	(97人) 100.0%
	女	64.3	35.7	0.0	(84人) 100.0%
	計	55.2	44.8	0.0	(181人) 100.0%
中 学 生	男	61.2	38.1	0.7	(134人) 100.0%
	女	46.6	52.7	0.8	(131人) 100.0%
	計	54.0	45.3	0.8	(265人) 100.0%
高 校 生	男	44.3	55.7	0.0	(106人) 100.0%
	女	58.6	41.4	0.0	(116人) 100.0%
	計	51.8	48.2	0.0	(222人) 100.0%
総 計	男	51.9	47.8	0.3	(337人) 100.0%
	女	55.3	44.4	0.3	(331人) 100.0%
	計	53.6	46.1	0.3	(668人) 100.0%

Ⅲ 結果の要点

(1) 基本的特性

新宿区の小学校5年生から高校3年生までの子どものいる世帯は、2世代世帯80.7%、3世代世帯15.7%が主要である。5世帯のうち4世帯までが親と子のみで構成される世帯となっている。

世帯員数は「4人」の世帯が44.9%で最頻値である。これに「5人」26.6%、「3人」12.3%がつづいている。

子どもの学齢段階別に公立に通うものの割合をみると、小学生のばあい92.8%、中学生のばあい80.8%、高校生のばあい41.9%である。性別にみると、中学生、高校生の女子で私立に通うものが高率である。

高校生にのみ限定して在籍する科をみる。普通科85.6%、商業科7.2%、工業科3.5%、その他1.8%である。

子どもたちのきょうだいの数は「2人」56.4%、「3人」25.3%、「1人」13.0%である。

子どもの専用の部屋の有無についてみると自分だけの部屋をもつのは50.1%、きょうだいと共用の部屋をもつのは35.8%、自分の部屋またはきょうだい共用の部屋のないのは13.6%である。専用の部屋をもつものの割合を学齢段階別にみると小学生31.5%、中学生52.8%、高校生62.2%となっている。高学齢になるにつれて専用の部屋をもつ割合が高くなる。

現代の青少年は物質的にめぐまれた生活をしているといわれることが多い。今回の調査では1万円をこえる各種品名をあげ、その回答をえることにした。持っている子の高率順にその品名をあげるとつぎのようになる。腕時計83.7%、自転車55.5%、カセットつきラジオ50.3%、カメラ29.3%、スポーツ用品18.7%、ステレオ18.4%、オートバイ3.3%である。男女別では、男子のほうでこうした高額専用のもちものがある割合が高い。

父親と母親の年齢と学歴・職業についてみる。

父親の年齢は45歳以上50歳未満が33.1%で層がもっとも厚くなっている。学歴は大卒が39.5%で最頻値である。職業は98.0%の父親がもっている。その内訳は、技能工・生産工程作業者および単純労働者の構成比がもっとも高く24.2%である。これに管理的職業従事者18.2%、専門的・技術的職業従事者17.5%、販売従事者17.2%などがつづく。高学歴で管理的・専門的・技術的職業につく父親の割合が高い。

母親の年齢は40歳以上45歳未満が36.5%で最頻値である。学歴は旧中、新高率が56.4%で最頻値をなしている。職業をもつ母親は56.6%である。職業の内訳は、事務従業者24.4%、サービス職業従事者24.4%、技能工、生産工程作業者および単純労働者20.0%、販売従事者19.5%などとなっている。

配偶者の有無別についてみる。親全体では配偶者がいるのは94.9%である。配偶者のいない単親は4.7%である。

(2) 子どもの余暇・遊び場・仲間

現代の子どもは時間、空間、仲間の3つの間をうしなっているといわれることがある。

都心部の子どもたちの実態はどうであろうか。

余暇活動を14とおりに分類し、調査日前日なにかをしたかをたずねてみた。3つまでの複数回答をとった結果はつぎのとおりである。「テレビをみた」62.2%、「勉強をした」53.2%、「マンガや雑誌をみたり本を読んだりした」38.1%、「音楽をきいたり楽器を演奏したりした」ものが21.5%、「家事手伝い」16.6%、「スポーツをした」15.4%となっている。夏休み中で余暇時間のすごし方はほほ子どもが自由になるとかんがえられるが、室内での活動が多いのが目につく。

テレビ視聴、読書は高学年になるにつれて低下する傾向がみられる。勉強をしたものが高率なのは中学生においてである。

学習塾やけいこごとに通っているのは64.2%である。学習塾やけいこごとに通っているものに限定すれば平均して1人あたり1.5種類の塾ないしはけいこごとに通っている。学齢別にみると、小学生では85.8%、中学生では72.9%、高校生では35.6%がそうしたところに通っている。

遊び場については「最近の晴れた日のおもな遊び場はどこですか」という設問をした。全体としては、児童遊園・公園25.0%、路地・道路が23.0%と多く、以下家の庭、校庭、空地、原っぱ、神社、寺の境内、川原、土手がいずれも10%未満の回答となっている。

小学生は公園、路地・道路で遊ぶ割合が高いが中学生・高校生になるとそうしたところでは遊ばなくなっている。

仲間についてはどうか。うちあけばなしやないし話のできる同性の友人は94.2%のものがもっている。そうした友だちのいないのは男子でも7.1%、女子で3.0%である。男子に孤立しているものが高率である。高学年になるにつれて同性の友人の数は増加する傾向がみられる。

うちあけばなしやないし話のできる異性の友人をもつのは31.1%である。小学生では24.3%、中学生では26.4%、高校生では42.3%である。

(3) 親子関係

家庭内において親子がふれあう時間はどれほどであるか。男子のばあい父親とともに活動をしている時間は2時間以上3時間未満が27.7%で最頻値であり、母親とのそれは4時間以上32.0%が最頻値である。女子のばあいは父親、母親いずれとも4時間以上の一緒に活動時間をもっているものが最頻値である。平均的には男子と父親のふれあいの時間がもっとも短くなっている。

学校であったことや友だちのことについて父や母と、または子どもと話し合いをもつか、ということについて親子関係をみた。回答者の主観的判断によっているのであるが父母別、男女別でつぎのような回答の分布を示した。すなわち、同じ時間の話し合いでも親のほうがよく対話しているようにうけとめ、子どものほうはそれほどでもないと回答している。母親と女子、母親と男子、父親と女子、父親と男子の順で対話が少なくなっている。これはさきに見たふれあいの時間とほぼ対応している。

なお、子どものために記念として残しているものをたずねてみた。高率順にいえば、学校の通信簿、アルバムがそれぞれ95.1%であり、母子手帳93.0%、臍の緒79.6%、保育園や幼稚園、学校での製作物74.1%が高率である。ほかに人形やおもちゃ36.7%、録音テープ25.6%、ハミリフィルム20.8%なども保存されている。

(4) 親子関係 (ii)

親が子どもを教育するばあい、ある行為をほめてそれを促進する方法と注意してそれを促進する方法がある。

子どもはどのようなことをほめられているのかをみると「手伝いをよくした」29.3%、「学校の成績がよくなった」16.7%、「勉強をよくした」15.3%、「なんでも自分からしたひとりでなにかをした」11.3%である。「手伝いをよくした」ことをほめられるのは性による差がめだつ。すなわち男子24.8%、女子33.3%である。家事についての役割づけが女子のほうでつよくなされている。

「学校の成績がよくなった」ことについてほめられているのは、小学生13.9%、中学生で17.9%、高校生で19.4%である。学齢が高くなるにつれて学業成績をほめられる割合が高まる。「勉強をよくした」ことをほめられるのは中学生においてもっとも高率である。

家庭で習慣的に行なっている家事手伝いを男女別・学年別でみるとつぎのようである。すなわち男子のばあい高学年になるにつれてあきらかに家事手伝いの役割が減少していくのたいして女子のばあいどの学齢段階でも8割以上が家事手伝いの役割をにっている。女子の家庭における家事遂行者としての役割は、男子よりもつよく伝達されているようである。

子どもに父あるいは母の注意することをたずねてみた。全体では「勉強すること」43.0%、「整理整頓をすること」27.2%、「ことばづかいやあいさつをすること」24.1%、「健康や安全に気をつけること」22.9%などが高率である。

男女別に親にどのような注意をうけるかをみる。数値は省略するが、男子のばあい女子よりも勉強についての注意をよくうけ、女子のばあい男子よりもことばづかいやあいさつを注意される割合が高率である。

学齢段階別にみると「勉強」は小学生で48.1%，中学生45.7%，高校生35.6%と学齢が高くなるにつれて注意される割合が低下する。「規律正しい生活をする事」、「ひとに迷惑をかけないこと」は高学年になるにつれて注意されていると意識する割合が増加している。

子どもからみて、父母の注意がどのように異なると意識されているであろうか。その差の大きいのは「勉強」についてである。父親33.3%，母親51.1%である。接触時間が長いぶんだけ母親は子どもに勉強することを注意しているものとみられる。

以上は子どもに意識された親のほめ方、注意のしかたである。親自身は子どもにどのような注意をしているとかんがえているかをみる。全体としては、「健康や安全」37.1%，「ひとに迷惑をかけないこと」34.3%，「ことばづかいやあいさつ」28.7%，「勉強すること」27.2%である。子どものほうでは親から注意されること。第1位は「勉強」であったが、親のほうから回答はそれが第4位になっている。親が勉強することを注意したつもりでなくとも子どものほうではそれにたいして敏感になっているといえるであろう。

父母別にみると、父親では「健康や安全」39.2%，ひとに迷惑をかけないこと」32.7%，「勉強」30.1%が高率である。母親のばあい「ひとに迷惑をかけないこと」35.6%，「健康や安全」35.4%，「ことばづかいやあいさつ」31.8%である。子どもの意識には母親がとくに「勉強」についての注意をするとうつつているが、母親のほうではそれについての意識があまりない。

親の注意はどのように意識されているかをみる。男子、女子ともに父親からの注意を「ありがたいと思う」と回答した割合が高く、母親からのそれを「あまりとやかくいわないでほしい」と回答した割合が高い。男子、女子ともに同性からの注意を「きびしすぎる」と意識する割合が高い。

(5) しつけについての夫婦の関係

しつけについて夫婦の間で意見や考えが一致しているかどうかをたずね一致していないばあいどちらの意見がとおることが多いかたずねてみた。「おおいに一致している」、「ほぼ一致している」は75.5%である。「あまり一致していない」、「ほとんど一致していない」は15.3%である。「夫または妻にまかせている」と答えたものは4.3%である。一致していないばあい妻の意見がとおると回答したもの51.0%，夫の意見がとおると回答したもの44.1%である。妻の意見のとおり割合が高い。

(6) 父親像・母親像

働く父親・母親を子どもはどうみているかをたずねた結果はつぎのとおりである。もっとも多い回答は「感謝している」48.6%であり、「尊敬している」18.6%，「苦勞している」

7.5%、「誇りにおもう」2.1%である。「自分も父(母)のように働きたい」と思うものは2.4%と低率である。父母別にみると、父親にたいしては「感謝している」、「尊敬している」、「苦勞をしている」というのが高率順の回答である。母親にたいしては「感謝している」、「苦勞をしている」、「尊敬している」の順になる。母親が働くことについては、苦勞が目につくようである。

子どもからみた父母像と父母自身がかんがえている自画像についてみる。はじめに、子どもからみた父親像である。「やさしい」35.6%、「仕事中心の生活をしている」34.0%、「明かるい」27.8%、「さっぱりしている」24.5%、「しつけがきびしい」21.2%などが主要な回答である。これにたいして父親自身の回答はつぎのような高率順である。「仕事中心の生活」44.1%、「家庭中心の生活」29.4%、「しつけをきびしくする」27.5%、「やさしい」26.1%、「信念をもっている」24.8%などとなっている。こうしてみると、子どもたちは父親自身が思っているよりも、「やさしい」、「明かるい」父親だと思っている割合が高く、父親自身が思っているよりも「仕事中心の生活」、「家庭中心の生活」、「子どもに理解がある」という回答の割合は低い。

母親についての子どもの回答はつぎのとおりである。「明かるい」46.1%、「家庭中心の生活」35.1%、「やさしい」29.8%、「さっぱりしている」28.7%、「しつけがきびしい」22.4%などである。母親自身の回答は「家庭中心の生活」47.5%、「しつけをきびしくする」34.0%、「よく相談にのる」31.5%、「明かるい」28.7%、「さっぱりしている」28.7%である。子どものほうでは、母親を「明かるい」、「やさしい」存在としてうけとめている。母親が思っているほど「家庭中心の生活をしている」、「よく相談にのる」、「しつけがきびしい」存在とはかんがえていない。

親にたいしてなにか希望することがあるかたずねてみると全体の30.5%が「ある」と回答している。過半数が親についていうことがないほど満足しているようである。性別でみると「ある」という回答は男子で26.4%、女子で34.7%である。女子のほうで親についての希望が高率に回答されている。男子のばあいは「子どもの気持ちをわかってほしい」、「とやかくいわないでほしい」、「なんでも買ってほしい」という希望が高率である。女子のばあいは、「とやかくいわないでほしい」、「子どもの気持ちをわかってほしい」、「ほかのきょうだいと差をつけなくてほしい」という回答が高率である。親とのふれあいや対話の少ない男子が「子どもの気持ちをわかってほしい」とのぞみ、その相対的には高かった女子が「とやかくいわないでほしい」とのぞんでいるわけである。

(7) 進 学

調査の企画がスタートした時点で埼玉県新座市において進学をめぐるトラブルから父親が高校生の息子を射殺するという事件がおこった。新宿区の子どものたちの進学意欲と進学をめぐる親子の葛藤をさぐってみた。

まず、子どもの進学希望がどのレベルに志向されているかを中学生と高校生に限定してたずねた。全体でみると大学が55.0%、短大が11.3%、高校が14.2%となっている。男女別では大学までの進学希望は男子で68.8%、女子で41.3%である。こうしたアスペレシヨンの差がなぜ生じるのかは明らかでない。

中学生のばあいは大学51.3%、短大11.3%、高校16.2%である。高校生になると大学59.0%、短大11.7%、高校11.7%である。大学への進学は高校生になるとさらに高くなる。全国の大学進学率が昭和55年時点で30%台であるからこの地域の高校生の進学のアスペレシヨンははるかに高率である。

親が子どもに進学させたいレベルは全体としては大学57.1%、短大16.0%、高校11.7%などとなっている。親のほうで短大の割合がやや高率である。

親の性別と子どもの性別をクロスさせてみる。男子をもつ父親では大学が82.6%、女子をもつ父親ではそれが31.4%と半減する。男子の母親では大学が75.6%、女子の母親では大学が40.3%である。父親いずれも男子のほうで大学進学をさせたい希望が高く、女子のほうでそれが低い。こうした親の女子についての期待が子ども自身の進学意欲に反映する一面もあるとかんがえられる。

進学をめぐる親子の葛藤はどうであろうか。それがあるといふ子の回答は16.2%、ほぼ6人にひとりの割合である。その理由の内訳は、志望校があわない、親の考えるほど高いレベルの学校に行きたくない、志望科があわない、親が学校の成績にこだわりすぎる、親が勉強のしかたに干渉しすぎる、親の考えるより高いレベルの学校に進学したい、などの順になっている。これに対し親のほうでは進学をめぐる葛藤があるという回答は7.6%であった。父母別ではほとんど差がみられない。こうしてみると子どものほうが進学をめぐる葛藤をよく意識していることがわかる。親の期待のつよさにどのようにこたえていくかという子どもの苦心がみられる。

子どもと親がテストと勉強の関係をどのようにとらえているかをつぎのような設問でたずねてみた。「ある受験予備校の標語はテストの1点の差が人生を決めるといふものでした。これについてあなたはどうか考えますか。

- ① そのとおり、だからしっかり勉強したい。
- ② そのとおり、しかしほどほどに勉強したい。

③ そうは思わない。しかししっかり勉強したい。

④ そうは思わない。だからほどほどに勉強したい。」

子どものほうでは、③の回答が43.3%で最頻値である。①は27.7%、②は16.6%、④は11.1%である。中学生と高校生でみると前者のほうで①に回答するものの割合が高率である。テストの1点の差の重みは中学生のほうで痛感されているとみてよいであろう。親のほうでは③が65.5%で最頻値を示している。ほかは10%から12%の範囲で分布している。子どもはいずれにせよしっかり勉強したいとかがんがえ親のほうでもしっかり勉強してもらいたいとかがんがえている。

(8) 自殺をめぐる親子の意識

自殺をしたいと思ったことのある子どもは全体で14.8%、ほぼ7人にひとりの割合である。性別でみると男子7.7%、女子22.1%である。女子のほうで自殺をかんがえるものの割合が高い。この傾向は小学校、中学校、高校を通じてかわらない。学齢段階別、自殺をしたいと思ったことがあるものの比率をみると小学生で6.1%、中学生で12.5%、高校生で24.8%である。社会的に成長しながら死を考えるような悩みももつようになるということが示されている。どのような理由が子どもに自殺を考えさせるのか該当者にたずねてみた。その高率順は「友だちとの交際がうまくいかなかった」25.3%、「親とけんかした、親にしかられた」20.1%、「性格上の悩みがあった」15.1%、「勉強がうまくいかなかった」12.1%などとなっている。友人関係や親子関係のつまずきは子どもに自殺を考えさせるつよい要因である。性別にその理由をみると女子のばあい友だちとの交際のつまずき、男子のばあい親とのけんかで死を考えるものの割合が高い。学齢段階別では小学校、中学校、高校を通じて「友だちとの交際がうまくいかない」ことが最頻値を占める。小学生のばあい、ことにこの理由が高率である。2位の理由は、小学生では「親にしかられた」、中学生では「勉強がうまくいかなかった」、高校生では「性格上の悩みがあった」となっている。

自殺を考えたことのある子どもについてそのことを親も知っていたのは3人にひとりである。ほかのふたりは親に知られていない。

親のほうに子どものころ自殺をしたいと思ったことがあるかどうかをたずねてみた。「考えたことがある」という回答は13.9%である。この比率は現在の子どもが自殺を考えたことがある、それにほぼ近い。父親で子どものころ自殺を考えたことがあるのは12.1%、母親では15.5%である。父親のほうが男の子より自殺を考えた割合が高い。

(9) 学校不適応

学校は子どもにとっての第2の生活の場である。そこでの生活のマイナスの経験をさぐっ

てみた。過去1年間で友だちから何らかのいやな行為を受けたことがあるかをたずねてみた。そのような経験があったという回答は全体の28.2%である。その内訳は「ことばでしつこくからかわれた」14.7%、「物をかくされたり、とられたりした」8.1%、「おどしの視線や態度をとられた」3.6%、「なぐられたり、けられたり肉体的暴力をふるわれた」3.0%、「ことばでおどされた」2.7%、「金品をせびられた」1.0%である。肉体的暴力を受けたばあいなどは親が認知する割合が高いが、そのほかのばあいの被害はほとんど親に知られていない。

学校に行くのがいやになるというのは登校拒否の予兆のようなものであろう。こうした子どもはどれほどの割合でいるであろうか。「この1年間で学校に行くのがいやになったことがありますか」と、2つまでの回答をゆるしてたずねてみた。それがあるといふ回答は30.9%である。その内訳をたずねてみると「やる気がおこらない」10.0%、「友だちといさかひがあった」7.5%、「先生になじめない」4.5%、「勉強がついていけない」3.1%、「自分の希望した学校ではなかった」3.1%などである。男女別にみると、学校に行くのがいやになった経験をもつのは男子で37.2%、女子で24.6%である。学齢段階別に割合が増加するのは「勉強がついていけない」、「友だちといさかひ」、「やる気がおこらない」「自分の希望した学校ではない」などの回答である。

⑩ 逸脱的行為への関心、親の抑制

子どもたちはどのような逸脱的行為に魅力をかんじ、親はそれらのどのようなことを心配しているかをみた。

非行予防の点から一般に注意がうながされることの多い項目のリストを中学生と高校生に示して「自分もやってみたい」ことを回答させてみた。全体としては「外泊してみたい」23.1%、「学校できめられた以外の服装や髪型をしてみたい」19.3%、「酒をのんでみたい」14.2%、「ディスコで踊ってみたい」13.5%、「たばこをすってみたい」7.8%、「家出をしてみたい」6.4%、「異性の友だちと深い交際をしてみたい」6.0%、「年齢制限のある映画をみたい」1.9%、「万引をしてみたい」0.6%、「シンナーをすってみたい」0.3%となる。なお無回答は50.1%ある。この回答にはすでに実行したことがあるものはふくまれていない。性別でみると男子のほうで「喫煙」、「異性と深い交際」という回答が高率であり、女子のほうで「ディスコでの踊り」、「校則以外の服装や髪型」という回答が高率である。

親のほうで心配しているのは「校則以外の服装や髪型」11.3%、「喫煙」5.3%、「異性と性的交渉」5.1%、「外泊」3.3%、「シンナーあそび」2.5%、「ディスコでの踊

り」2.4%、ほかに1%台で「家出」、「飲酒」、「年齢制限のある映画をみること」がある。

どのようなひとが子どもの非行の抑制者になっているかを知るひとつの方法として、「わるいことをしたときにそのことを知られたくないのはだれか」ということをたずねた。そのようなひとがいるのは全体の84.3%、いないのは14.1%である。いるばあいの内訳は父28.0%、母18.3%、友だち13.0%、先生10.8%、近所の人7.0%などが主要である。この順位は、男女において差がない。男子のほうが父親を、女子のほうが母親を回答している割合がわずかずつ高率である。

(1) 子どもの将来像、現在の悩み

子どもは将来どのような生活をしたいかんがえているか、親は子どもにどのような生活をさせたいとのぞんでいるかをみる。

子どものえがく将来の生活は、「健康にくらしたい」24.1%、「趣味にあったくらしをしたい」19.0%、「いい人と結婚して楽しくくらしたい」18.0%、「親子で仲良くくらしたい」16.5%などである。女子に「結婚志向」が高率で男子に「趣味志向」が高率である。学齢段階別では小学生のころは「親子で仲良く」という志向が高率であるが、中学生・高校生になると「結婚志向」や「趣味志向」に分化していく。

親たちのぞむ子どもの将来は「ともかく健康にくらしてほしい」44.2%、「金持ちでなくても清く正しいくらしをしてほしい」15.6%、「いい人と結婚して楽しくくらししてほしい」15.0%、「社会のためになるようなくらしをしてほしい」9.9%、「親子で仲良くくらしたい」8.2%となる。親のほうでは「社会のためになるくらし」と希望しても子どもにはそれがわずかしみられないのが注目される。

悩みがある子どもは全体で38.0%、ほぼ5人にふたりの割合である。性別にそれを見ると男子31.2%、女子45.0%である。それを学齢段階別にみると、小学生で17.7%、中学生では34.0%、高校生では59.5%となる。悩みの内訳は2つまでの複数回答であるが、「勉強・進学」55.5%「将来について」25.5%「友だち・仲間のこと」18.5%、「小遣い不足」11.1%などとなっている。「勉強・進学」のことでもっとも悩みの高率なのは中学生であり、これに高校生がつぐ。しかし、いずれにせよ子どもたちの悩みの中核は「勉強・進学」のことである。男女別では女子に容姿についての悩みが高率である。

悩みごとは自分で解決するばあいと、だれかに相談して解決するばあいがある。全体としてはだれかに相談して解決したのが73.2%、だれにも相談しなかったのが26.8%である。これを男女別にみると男子のほうでだれにも相談しない割合が高い。学齢段階別では小学生

高校生でだれにも相談しなかった割合が高い。相談の相手は、全体的にみると友だち45.7%、母親30.7%、父親11.0%、きょうだい6.3%、先生3.9%などとなっている。性別でみると男子は友だち39.0%、母親34.3%、父親15.2%であり、女子は友だち50.3%、母親28.2%、父親8.1%である。相対的にいえば男子のほうが両親に相談する割合が高く、女子のほうが友だちに相談する割合が高い。

親のほうの悩みについてはどうか。全体としては、悩みのあるのは33.2%である。子どもの回答率よりはさがるが、それでも3人にひとりの親が悩みをもっている。親の性別でみると父親で悩みをもつもの31.4%、母親で悩みをもつもの34.8%である。大きい差はないとみてよいであろう。

悩みをもつ親を子どもの学齢段階別にみると小学生の親34.3%、中学生の親35.5%、高校生の親29.7%である。高校生をもつ段階で悩みをもつ親が減少する。それでも3割の親が悩んでいる。

子どもについての親の悩みの内訳はどうか。全体的にみると「勉強や成績のこと」45.5%、「性格のこと」19.4%、「病気のこと」9.5%、「交友関係のこと」7.2%、「就職や職業のこと」6.3%などとなっている。子どもと同様に親のほうでも「勉強や成績のこと」が悩みの中核をなしている。父母別にみると父親は「勉強・成績」52.1%、「性格」16.7%、「病気」7.3%であるのに対し、母親は「勉強・成績」40.5%、「性格」21.4%、「病気」11.1%である。父親のほうが子どもの勉強や成績のことで悩んでいる。

IV 若干の考察

さて、ここでは従来の研究者の業績や知見と照らし合わせながら、この地域での親子関係を抽象化してみる。

新宿区に生活する小学校5年生から高校3年生までの子どもをもつ父親の学歴は、大学卒業がほぼ4割を占めるほどに高い。その職業は生産工程作業者および単純労働者、管理的職業従事者、専門的・技術的職業従事者の割合が高い。母親の学歴は、旧中、新高卒が過半数であり、約6割が働いている。

調査の客体となった子どもたちの遊びにおいて仲間と時間はあるが、遊び場の不足が回答されている。親子とも自由にのびのびと遊べる空間の希望は高い。地価の高い都心部における親子の特徴的の希望である。

親子関係についてふれる。

親の半数近くは、子どもがとにかく健康にいらしてほしいと願い、清々潔白な生活を将来

いとむことを期待している。これに対して子どもの将来像は健康に過ごすことがやや強くあらわれるが、趣味にあったくらしや結婚志向、親子で仲良くくらすことがあげられる。

親子のふれあいの時間や、対話は、母親と女子、母親と男子、父親と女子、父親と男子の順で短く稀薄なものになっている。

こうした父の不在がなにももたらすかは教育学、社会学、医学などの研究者が調査と考察をふかめてきたところである。

たとえば宮本常一は『家郷の訓』（1967）においてわが国の「父と子の縁はうすいのである」と指摘している。そのようになる理由を宮本は父母のしつけの範囲のちがいに求め、父の場合は、その仕事を主として教え込んだ」とのべている。しかし、新宿区の父親のばあいはそのような仕事の指導と訓練へのうちこみはつよくなさそうであった。仕事をする父親を感謝し尊敬はしているが父のように働きたいという回答はきわめて低率であった。

父と子の関係の稀薄さを指摘したのは宮本常一にとどまらない。増田光吉は『アメリカの家族 日本の家族』（1969）においてわが国の家族結合が母子中心であることを指摘している。また小山隆編『現代の家族の親子関係』（1973）では、父親の不在のもたらすことがつぎのとおりにふれられる。「しつけ」の担当者からしだいに男性がしりぞいて男性不在の状況が発生するにつれて少年の男性への同一化がむずかしくなり、男性的役割への社会化が不十分となるだけでなく、男性への同一化の一手段として犯罪が増加する。こうした理論にも注目しなければならないだろう。

徳岡秀雄は「庶民におけるしつけ」（森岡清美・山根常男共編『家と現代家族』1976）において現代家族におけるしつけが公的性格をうすめ、私事化したこと父子関係が稀薄化し、母子密着をエスカレートさせたことをとりあげている。稲村博は『日本型親子関係の病理』（1980）において、家庭内暴力が父性の欠如した父親と過保護・過干渉の母親、過敏で小心な子どものパーソナリティの組み合わせにおいて出現頻度が高いという。

海外の研究者も父の不在を話題にしている。1972年にはA. ミチャーリヒが『父親なき社会—父親喪失』を書き「専門化の発達による父親喪失、父親の具体的な姿が見えなくなったこと、最初の対象関係一般の弱化がもたらされたこと」を指摘している。同じ年にU. ブロンフェンブレンナーは『2つの世界の子どもたち』において父親の不在がつぎのようなさまざまな特徴をもたらすと指摘した。①意欲が低くて目標を達することができない。②目前の報酬を得ることをがまんして延ばし、後に大きな満足を得るようにすることができない。③自尊心が低く集団の影響を受けやすい。④少年非行に走りやすい。⑤こうした影響のすべては女子よりも男子に著しく現われやすい。

新宿区の子どもたち、とくに男子においてはこうした研究が示している父子関係の稀薄さがみられる。子どもたちの希望をきき、研究が示唆するところにそうなら新宿区の父子関係はみなおされなければならない点がある。もちろんこのとき気をつけなければならないのは過剰な母子関係につぐ第2の過剰な父子関係におちらないようにすることであろう。

この調査の対象となった親子の悩みの焦点は勉強にある。子どもよりも親のほうが教育のゴールを高く見定めている。小山隆編『現代家族の役割構造』（1967）では昭和35年に東京都区部で16才から20才までの子のある世帯を抽出し親子関係にあらわれた役割期待と役割行動の調査をした要点が記述されている。それと今回の調査を対比してこの20年間に勉強についての親子の意識がさらに鋭くなっていることがしられる。高等教育への志向がいっそう高まったことの反映である。親は高等教育をめざす理由を「高い知識を学ばせる」、「進学はとうぜん」、「よい就職をさせたい」と回答している。前2者の回答は、あとの回答と深層では結ばれているとかんがえられる。労働力の価値を構成する要素が教育であることを多くの親は生活実感として、および客観的事実として知らされることから、高水準の教育志向がおこるのである。労働力を販売するよりほかに生活する手だてのない親が子どもの労働力の質的向上をめざすという構造がここにみられる。学習塾への依存はこのヴァリエーションである。

勉強についての悩みの解決はしかし学習塾でなされるべきではなく学校教育の場でなされるべきであろう。子どもたちが学校に行くのがいやになるのは、学習についての意欲の喪失が大きい要因である。これを本人の努力や能力の不足にもとめるのは安易である。学習は学校教育においてもっとも充実しなければならない。親、教師、教育行政担当者は積極的にこの討議をなすべきである。

進学についてのアスペリションは男子よりも女子のほうが低い。親のほうでも女子への期待は低い。男子のばあい、高学年になるにつれて家事手伝いから解放されて勉強に集中できる条件がととのえられるようになっている。また所持品も男子のほうが多い。こうしたことは、女子のパーソナリティおよびその社会的な将来の展望に影響をあたえるとかんがえられる。男性中心の価値観がここにみられる。R. J. ハヴィガーストは『リバーシティの青年』において成人の条件のひとつを家事能力においている。この観点からすれば新宿区の男の子たちはこの能力の開発の機会をうばわれているともいえる。こうした性別の役割学習をした男女が新しい家族を形成したばあい、夫婦の協調と葛藤がどのようになるかは価値観の多様化がいわれるなかで余断をゆるさない問題である。

子どもの自殺についてはそれらをかんがえる割合をみた。ほぼ7人にひとりの割合でこれがかんがえられていた。しかし、これはとくべつにおどろくべき数字ではなさそうである。親た

ちの年少期にもこれほどの割合で自殺がかんがえられていたことをみた。しかし、自殺をしたくなった理由の主たる内容が友人、親子関係の挫折にあることは注目されてよい。子どもたちは高学年になるにつれて交友の範囲を拡大してゆく。親への愛着だけでなく友人との交流や親愛に忠誠の対象のひとつをみるのである。それは異世代の親愛関係を同世代の親愛関係に変化させながら自分たちの時代を構築していく準備作業でもある。このときの挫折の衝撃は児童にとって大きい意味をもつことを示している。とくに中学生、高校生にとってはR. J. ハヴィガーストのいう青年期の発達課題のひとつである「性の闘い」がふくまれることによってこの問題は大きい。したがって、子どもの交友関係には親・教師は大いに洞察力を働かせなければならぬ。

親とのいさかい、親から受けた叱責が自殺がかんがえさせるという意味も大きい。調査の要点ではふれなかったがこの調査においては、過去半年間での泣いた経験をたしかめている。小学生で8割、中学生で6割5分、高校生で5割が泣いた経験をもつ。そのいずれでも泣いた理由の第1位は「親とけんかし親に叱られて泣いた」ことになっている。男子のほうで泣く割合は低いそれでも高校生の男子の10人にひとりには親とのいさかい、親の叱責で泣いている。そして、このようなことがおこったとき、ある部分の子どもたちは自殺したくなるのである。親とのいさかい、親の叱責には「勉強」のことがからんでいる。

したがって、親子の勉強についての悩みの相談相手としては教師が重要な役割をになうことになる。しかし、それほどに相談相手とされているようには見えない。これは進路相談会などでの相談が回答にはいってこなかったことにもよるとみられる。また、進路相談会などの時間ぎめの相談では解決されないような深い悩みが親の側にあることを示しているかもしれない。

ともあれ、こうして子どもと親のいさかいは子どもが自己の存在を無価値にかんがえる契機であることは注意されるべきであろう。

子どもたちのなかにどれほどの逸脱的行為への興味があるかも調査された。外泊や校則以外の髪型や服装をすること、飲酒、喫煙、家出、異性との性的交渉などが中学生、高校生のしてみたいことであった。こうした志向があるからといって、それらにすべての親が過敏になる必要はあるまい。大部分の子どもたちはこうしたことに興味や関心をもちながら非行におちいらずに成長していく。ふたたびR. J. ハヴィガーストの青年期の発達課題を引けば、それらのなかに自由への要求、内界の発見、人世探究、現実との接触がふくまれる。青少年が逸脱的行為に関心をもつのも成人社会に服装の自由があり、飲酒、喫煙の自由があり性的交渉があるかぎりさげられないことである。要はこうした子どもが自己放棄のかたちで逸脱にはしらないようにすることである。あるいは親や教師や地域社会の人びとはそうしたことに関心をもつ子ど

もを自分たちの青少年期のそうしたことへの対処のしかたにてらしあわせながら親しくふれあっていくことが重要である。

青少年の非行に過敏になったあまり過剰管理構造のなかに子どもを封じこめて硬直した青年をつくることはさけるべきであろう。

いま、非行の増加がいわれ、青少年の甘えが議論されている。こうした文脈のなかでつよい父親の存在、威厳と権威に満ちた父親の存在が期待されるようである。しかし、これについては、T. W. アドルノの『権威主義的パーソナリティ』のつぎのような証言に耳をかしておく必要がある。すなわち権威主義的な家庭の子どもの特質をアドルノは「両親への否定的服従、両親に対する深層での怨恨と両親の犠牲にされたという感情の存在、深部における敵意への反作用として両親に対する固着した賞讃と理想化、権力への志向、そしていわゆる劣等者と弱者への軽蔑」と指摘している。

参 考 文 献

- 1950年 T・W・アドルノ『権威主義的パーソナリティ』 青木書店
1967年 小山隆編『現代家族の役割構造』 培風館
1972年 アレキサンダー・ミチャーリヒ『父親なき社会』 新泉社
1973年 小山隆編『現代家族の親子関係』 培風館
1973年 L・ペンソン『父親の社会学』 協同出版
1974年 原ひろ子・我妻洋編『しつけ』 弘文堂
1976年 森岡清美・山根常男共編『家と現代家族』 培風館
1977年 東京都都民生活局『大都市青少年の生活・価値感に関する調査』
1979年 東京都都民生活局『東京都青少年問題調査』
1980年 稲村博『日本型親子関係の病理 ―家庭内暴力―』 新曜社
1980年 総理府青少年対策本部、日本の子どもと母親
1981年 上子式次・増田光吉編『日本人の家族関係』 有斐閣